

学校内の新しいできごとを、生き生きとした文章で伝えること。これが通信などをつくる上で重要な点です。今回は、学校・学級通信に求められる現場感覚について、まとめていただきました。

## 「現場感覚と驚きの心と」

学年通信、あるいは学級だよりという名称であっても、編集方針の根本は新聞記事と重なる部分があるはずだ。新聞記事がもつような現場性、話題性を追求めることがあってもいいと思う。

保護者は、学校での新しいできごとを知りたいと思ひ、子は、日々の学校生活の記録を心の糧にしたいと思う。だとすれば、「通信」の記事にはまず、この学校、この学級の現場を書くという心構えが必要だろう。

私の読んだ数々の「通信」の中で、豊中市立第九中学校の栗林先生の書いた記事が印象に残った。生徒が校内の廊下によくガムを投げ捨てる。そのガムを教頭先生が丁寧にはがして話だ。こういう話にはお説教がつきものだが、この文章にはそれが無い。捨てられたガムには、ぷによぷによものもあるし、カチカチのものもある。

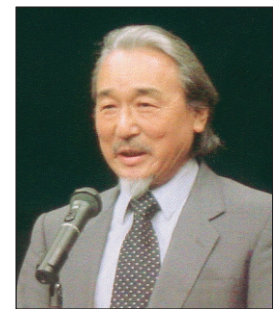
「ぷによぷによに、ガム獲りマシーンを突き刺す。ジュューシーな薫りが鼻先につーんと漂

う。うーん。甘しい！気持ち悪っ。ガム獲りマシーンと化した教頭先生、笑っているように見えるが怒っている。喜んでるように見えるが、心は泣いている」

記事の反響は大きかった。「うちの子に注意したで、先生」という保護者の声もあり、やがてガムのポイ捨てはなくなっていくた。

この文章の特長は、第一に現場感覚だろう。ぷによぷによ、なんていう表現は現場でこそ生まれる言葉だ。しかも筆者は教頭がガムをはがす姿を写真に撮り、通信に載せた。ガムと格闘する教頭の写真は、おおげさにいえばニュースの現場であり、時の人の姿である。訴える力が大きい。

一般に映像が目に浮かぶような文章の力は強い。たとえば「ゆっくりとしたひとときを持ちましょう」と呼びかけるのではなく、「食後のお茶でも飲みながら、コオロギの澄んだ鳴き声に耳をすませてみよう」と書いたほうが人々の記憶に残る。



●たつの・かずお  
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

栗林原稿の特長の第二は、驚きの心だ。「ガムを廊下に捨てるな。けしからん」という注意をいくら書きつけても、それだけでは話題にはならない。でも、それを黙々と拾う者がいることに驚き、その驚きを字にすれば多少は話題になる。まして拾うのが教頭先生なら筆者も読者も「えっ」と驚く。ニュース性とはそういうものだ。

おもしろい話ばかりを追う必要はないが、学校の内外で驚きの対象を探し、それを字にする日ごろの工夫が大切だろう。日常の些事にも、生涯、忘れえぬものが隠されている。

戦争前、小学四年の私は担任の先生の指導で、生まれて初めて、朝顔の栽培をした。芽がでて、葉がでて、花が咲く。なんでもないことなのに、自分の手で育てた花が開いたときの驚きは六十何年後の今も忘れない。あの朝顔の栽培は、幼い私には大々ニュースだった。大々ニュースの背後にあったのは、生きものの命の不思議さを見た驚きである。